

父親不在状況での男性性獲得 その1

— “もののけ姫” の心理学的考察を通して —

松 本 行 弘

はじめに

父親不在状況というのは父性機能¹⁾が混乱しているか働いていないことを示しており、日本の今日の問題であると思われる。このような状況下で若者が男性性²⁾を身に付けるためには様々な問題を解決していかななくてはならない、またどのような男性性を身に付けていくのかその中身も問われる。この観点から、“もののけ姫”というアニメを通して、作者宮崎駿が我々に示したものを心理学的に考察しようと思う。かなりの深読みとこじつけを恐れず、一つの見方としてここに表すものである。

この物語には、母親もしくは女性またはキャラクターが女性と思われるものは現われるが、父親らしき男性は登場せず、また主人公が求めるような男性性を持ったものは稀薄である。そのために全体が非常に女性的で母性社会の日本³⁾人に馴み易いものになっている。観客が1,000万人を越えた一つの要因として無理からぬことではないかと思われる。

この状況に一人の少年が主人公として現われる。アシタカである。アシタカには父親も母親もいない、そして物語の最後に至ってもそのことについては触れられない。

この物語は、神々が棲む、太古から続く深い森のシーンから始まる。

そもそも森とは何であろうか、それは生命を生み出し育てるものである反面、迷い込むと出られない恐ろしさも持っている。混沌としてその奥には何が棲むか分からない神秘さがあり、その神秘さを恐れて人が近付かない場所である。神が棲み、魔物が棲む世界である。人間の条理や知の遙かに及ばない、不合理

な世界でもある。

人間は森を恐れ、穢さぬ限りにおいて、森の優しさ温かさに触れ恵みを受けて来た。この生み育てる反面近づき過ぎると時には命を失うという森の2つの側面は母性性⁴⁾を表し、母なるもの⁵⁾、太母⁶⁾の象徴と思われる。

父性の侵入と心的外傷体験

物語はまさにその点から始まるのである。すぐに、主人公アシタカがヤックルと呼ばれる大カモシカに乗って現れる。途中で主人公の妹を含めた3人の乙女に出会い、森に異変が起きていることを告げ、村に帰るように言う。アシタカ自身は見張り場に行き森の様子を伺うことになる。村の西の森に異変があり、タタリ神が何の前触れもなく突然村に突進してくる。タタリ神と知ったアシタカが必死にこれを鎮めようとするがその祈りは通じず、やむなく2本の矢でタタリ神を殺すことになる。しかし、この時右腕にタタリヘビの呪いを受ける。ここに呼ばれるのが老巫女のヒイさまで、タタリ神に塚を造って怒りを鎮めることを約束するが、タタリ神は「～我が苦しみと憎しみを知るがいい」と言って朽ち果てるのである。その体内から黒い固まりであるツブテ（鉛）が見付かる。老巫女の占卜は、アシタカがその呪いによりいずれは死ぬ運命にあり、じつとこのまま村に止まって死を待つか、西に行き呪いを断つ方法を見付けるかの選択を迫ったのである、「そなたには自分の運命を見据える覚悟があるかい」。アシタカは村を出て西に向かう決心をする。出発に先立ち、祭壇に向かってマゲを切りそれを供えて一人社を出て、ヤックルに乗って村を後にする。妹一人が掟を破って見送るのである。

ここまでの物語から、主人公は少年であり、青年に手が届くかどうかの年頃と思われる。そして、まず出会った乙女が3人という3の数字から、見ている者に場面が変化する予感を与える。3⁷⁾は、過去・現在・未来という時間の変化を意味する数である。それはまた誕生・生・死につながるものでもある。主人公の暮らす村は森に囲まれるというよりも、森の中で森に守られて存在しており、隠れて住むには最も適した場所でまさに母親に守られている感じがする。

また、乗り物が大カモシカであり家畜化された馬ではないことは人間の手の加わらない野生の世界、つまり意識の外の世界であることを暗示している。物語の先で出てくるが、武士という職業集団が乗り物に使う馬は野生ではなく、人間によって訓練され意識の中で操作される道具となっている。そこでは最早、人間との感情のコミュニケーションはなく、人間の言葉も解しないし人との一体感もみられない受動的な生き物でしかない。馬は売買の品物で値がつく、値打ちがなくなれば打ち捨てられるのである。その在り方は極めて合理的で父性的である。一方、最後までアシタカに付き添う大カモシカにみられる人間との関係は、渾然とした母性との一体感を示している。

次にタタリ神の突然の出現であるが、もともとナゴの守というイノシシ神が人間の作ったツブテ（後にエボシの石火矢に当たったことが分かるが）で傷付いたことから世の苦しみや憎しみを集めてタタリ神になったのである。アシタカにはその苦しみや憎しみを宥めることができず、村を救うためにやむなく殺すことになる。アシタカが殺したものは何か。平和な母の胎内にいるような場所に何の前触れもなく、ツブテに骨を砕かれ、肉を引き裂かれたタタリ神が理不尽にも侵入する。ツブテによってイノシシ神が苦しみや憎しみの権化となる、そのツブテこそ人間の知恵から生まれたものであり、父的存在を意味するものである。このシーンは平和な母性世界に父性が侵入した場面である、そのことから、主人公が殺したものは父に他ならないのである。村を救うために宥めても宥め切れない不条理のもとに（アシタカの心の内面における）“父親殺し⁸⁾”が成されるのであり、これはいくら不条理とはいえそのままで済むことではなく、本人も右腕にタタリヘビという呪いを受けることになる。呪いは、右腕に火傷の傷（映像では湯気が出ていた）のように斑痕を残しそれが体に広がって死に至るもので、簡単に癒せるものではない。この呪いは、タタリ神の死＝父親殺しによる心的外傷体験⁹⁾であり、この呪いを解くことは、心的外傷体験を癒すことである。呪いは、苦しみや憎しみを身に受けることと共に父を殺した罪業感でもある。『父親殺しは、父なるものとして表される文化的社会的規範との戦いであり、自我が真の自立を得るためには、無意識からだけではなく、

文化的な一般概念や規範からも自由になるべきであり、そのような危険な戦いを経験する¹⁰⁾』ことになる。そして、ここでは第一分離・個体化¹¹⁾として母親からの身体的自立の契機となると思われる。自立の第一歩と考えられる。その後、アシタカは外の世界に出て行くのであるが、父を殺してそのまま隠れ里に残ること、また一族の長として止まることはできないであろう。更に、タタリ神は、見張りの老人（ジイジ）にはその正体が分かっているが、主人公の少年には得体の知れないものである。この時期に何の前触れもなく、突然、目の前に現れ、避け難いものである。この得体が知れないこと、何の前触れもなくおとずれること、しかも避け難いことは、第二次性徴の発現による思春期の生理的・心理的世界の変化を表していると推測され、少年がまさに思春期に突入したことを示している。そして思春期・青年期は知的好奇心の最も盛んな時であり、ツブテの意味するものを突き止めようとする欲求が湧いて来るのは自然な成り行きと思わる。主人公をして外の世界に向かわせる一因となることは想像に難くない。そしてまず、父性の後をたどることになるであろう。

老巫女の予言は、隠れ里にこのまま止まって呪いによる死を待つか、呪いを解くために隠れ里を後にして、不吉なことが起こっている未知の世界に出ていくか、自己決断を迫るのである。また、外の世界を“曇りなきまなこで見る”ことも指摘する、つまり自分の運命を直視するということである。結局、主人公は隠れ里を出ていく決心をするが、決して二度と戻ることは出来ない。これからは自分を守ってくれた母性世界を出てツブテに象徴される父性世界へ旅立つのである。森の世界から人間の世界へ出ていくのである。

父なるもの¹²⁾は他者であり、常に侵入者、切断者である。父の世界は絶えざる選択の道であり、果てしない人生の課題との対決である。己の運命との対決に必要な力と歩み続ける道である。

出発する時に主人公は祭壇に向かってマゲを切り落としそれを供える。これは違う世界に入るための通過儀礼¹³⁾（イニシエーション）であり、今までの自分に決別するのである。マゲを切る、髪をおろす、遺髪を残すなどは、今の生き方に死を与えることであり、死と再生の儀式¹⁴⁾である。もはや元には戻る

ことが出来ず、隠れ里の住人ではないことになる。この物語の中で、隠れ里のことが二度と出てくることはなく、主人公も隠れ里に帰ることはなかったのである、当然の帰結であり、隠れ里に象徴される母性的なものからまずは離れて行くことを暗示している。

父性世界へ

次に、アシタカがしたことは、タタリ神の足跡を追うことであった。父なるものは道であり、まずはそれを追っていくのだが、当然、時間や場所の違いから見失うことになる。しかし、一度歩き始めた道は新しいアシタカの道を暗示する。まず、里に出ることで、父性世界がどのようなものかを知らされるのである。そこで体験したことは“いくさ”である、人が憎しみ争い殺し合う世界である。アシタカは人を助けるために、何の躊躇もなく矢を射ることで2人の武士を殺す。その時、自分の右腕に異変が起り、凄まじい力が出ることを知る。このようなことは、この後何度かあるが、人の苦しみや憎しみを感じた時突然起こり、タタリ神が呪いをかけた時と同じ事態になることが分かる。これは、呪いが心的外傷体験であったことのフラッシュバック現象¹⁵⁾と解釈される。そしてアシタカには意識されないことからかなり深い無意識層にまで達する体験であるかも知れない。呪いは極めて深刻で強烈で意識的に操作できない、死にも匹敵するようなものであることが推測され、老巫女の言葉が蘇るのである。しかし、ここでアシタカには優しさそして決断と勇気といったものがあることが示された。

次に、里から都に出たアシタカは、体全体を頭巾とマントで包んだ姿で、市で米を砂金で求めようとする。まず、砂金と貨幣との関係は明らかで、どちらも価値がある。しかし、砂金はその合理性から言えば貨幣にはかなわない。アシタカは貨幣を知らない。貨幣には明確な価値としての決まり事があり、どこに行っても同じ価値をもつ。貨幣には決まり事、“法”があり、例外はない。正しいものは正しいとして守らなければならないのが法であり、貨幣は法の象徴である。そして、“社会の守るべき法を教えてくれるのが父である”。法は

父そのものなのである。つまり、隠れ里は母性に守られた世界であったが、都は父性の世界であり、都でいろいろな体験をすることは父の世界を学ぶことを意味する。また、頭巾とマント¹⁶⁾に深く身を包んでいるのは、依然として母性社会から来た自分の本性を隠すことで外（父性社会）からの攻撃をまず防ぐことを意味していると思われる。それは、ジコ坊から「どこから来た」と聞かれた時、「北と東の間から」と答え明確にはしなかったことから分かる。マントを脱ぎ、頭巾を取った時が初めて父性社会で生きて行くことができると思った時と考えられる。

砂金で困っている時、ジコ坊という怪しげな人物が現れる。ジコ坊は社会の裏も表も知っている人物で、男性社会の一面をアシタカに示すのである。一緒に歩いているときに後ろから3人の追剥ぎにつけられ、ジコ坊はすぐにそれに気付くが、アシタカはそれに気付かない。ここで、アシタカは人間の欲について学ぶことになる。

ジコ坊は、人を利用し、駆け引きも上手、嘘もつく、本音と建て前をうまく使い分ける。手段を選ばず、利益になることが価値あることといった世界観を持ち、それに似合った知識、行動力を身に付けている。アシタカが買い求めた米で早速夕げを作って自分の物のように振る舞い、それが自然に感じさせる。また、アシタカが話したタタリ神のツブテについて「知っているか」と聞かれた時、本当は知っているが、「知らない」と答えているのも本音と建て前の使い分けを感じさせる。ジコ坊は父性的なものの一面を代表するもので、アシタカもこの避けられない運命の道を目指すのである。

次の朝、アシタカはジコ坊に教えられたシシ神の森に呪いを解く手掛かりを求めて出発する。ジコ坊にはその通じる道の向こうに何があるかが見えるのである、「やはり行くか」と呟いたジコ坊が道の先にあるものについて言わないこと、黙ってヒントだけを与えて本人に選択させ自己決定させることは父性的な優しさであろう。そして、アシタカは黙ってジコ坊に頭を下げヤックルに乗ってそっと出て行くのである。

この段階で、アシタカは大人社会での礼儀を身に付け、最早少年ではなくなっ

たと思われる。

非人間的なもののとの出会い

場面は変わって、嵐の絶壁のシーンに移る。エボシ御前（これ以後は、御前と略すこともある）とゴンザに率いられ、石火矢衆に守られて、牛飼い達が米をタタラ場に運ぶ途中である。急峻な崖の道にさしかかった時、山の奥から山犬に乗った“もののけ姫”（これ以後は、姫と略すこともある）が手に槍を持ちマントの付いた仮面を被って襲って来る。御前の命令で石火矢が火を吹き、もののけ姫は追い払われる。しかし、その後、モロという山犬神が現れ、牛と4人の牛飼いが谷に落ちるのである。御前自身が石火矢でモロを撃ち、胸を撃たれたモロは谷底に転落する。御前は谷に落ちた牛飼い達には構わず、目的地のタタラ場を目指す。モロは尻尾を2つ持ち、不死身らしい。

ここではリーダーとしてのエボシ御前が現れ、男勝りで知恵と決断力を持ち、目的のためには非情にもなれる女性像として描かれている。力だけのゴンザを顎で使う迫力がある。また山犬を蹴散らす飛び道具を使いこなすことができる実力を示したのである。これはまさに先端技術に対する知識と技量を備えていることを示し、並の女性ではないことを表している。一方、“もののけ姫”の人間のようにありながら人間離れしていた異様な姿や撃たれた山犬が不死身で尻尾を2つ持つというような神性を示し、エボシ御前とは極めて対称的である。そして、この二つが対立するものとしてここに提示されたのである。非人間的なものと人間的なものの対立の幕開けである。

“もののけ姫”と呼ばれるのは、人間の世界から見ての呼称であり、姫の世界では“サン”と呼ばれているのである。それゆえに、“もののけ姫”と呼ぶか“サン”と呼ぶかでその主体がどちらの世界に属するかまたは近いかを表すことになる。人間でありながら人間でないことが“もののけ”であり、妖怪ではなく“姫”であることから本性は人間でありしかも年若く少女の印象を与える。

シシ神の森を目指していたアシタカは、谷川で2人の牛飼いを救うことにな

る。そしてモロ一族ともののけ姫を対岸に発見する。姫は、撃たれたモロの胸の傷口から血を吸い出している。そして、アシタカがモロ一族に気付かれた時、自ら岩の上に姿を現し、「シン神の森に棲むと聞く古い神か」と問いかけると、姫が「去れ」と一言叫んで山犬の背に乗って行ってしまう。

この場面がアシタカともののけ姫との初めての出会いであり、姫はアシタカを神聖な場所に近づく人間として「去れ」と言うのである。姫はモロの傷口から血を吸い出しているのだが、どこか母親の胸から乳を吸っている子供のような風景でもある。そして、モロは不死身であることが証明され、魔物であり神でもあることが示される。また、ここにアシタカの性質について、未知の物を恐れない勇気が追加される。

傷付いた2人の牛飼いを連れて、シン神の森を目指してさらに進み水の豊かな深い森に至る。そして水を汲もうとしたとき、金色の光の中にシン神のシルエットを見るのである。その時また右手のタタリヘビが騒ぎ出すが、泉に浸けることで少し軽くなる。牛飼いの負傷した右腕も少し痛みが引いたように感じる。牛飼いは森を極端に恐れるが、森の精霊であるコダマの道案内で森を抜けタタラ場の見える所にやってくる。

シン神との初めての出会いである。シン神もアシタカを見ている。その時のタタリヘビのざわめきは呪いを挟んでのシン神とアシタカの対峙から来るフラッシュバックではないかと思われる。しかし、この対峙は苦しみや憎しみを活性化するものではなく、逆に癒しを暗示するものであり、牛飼いの傷の痛みも薄らいだかのような印象を受けるのである。コダマは森の精霊であり、古くから続いた豊かな深い森であることを示している。そのことから、普通の人である牛飼いは魔物の類いとして信じることができず恐れたのである。しかし、アシタカが恐れないのは自分の出身が同じような森であって日常的に出会っていたからである。

コダマは豊かな森のしるしであり、コダマの母は大きな古木である。ここで少し木の意味するものを考えてみよう。『木は、枯れて再び蘇るため、全宇宙のドラマの再演と見做される。つまり再生と復活のシンボルである。木は三界

の間の仲介者であり、天上界、地上界、地下界につながっている。天上界は多種多様な世界に分化し、太陽の力、天の神々の世界へと通じ、地上界は時の世界であり、歴史の世界、幹に年輪を刻むのである。さらに地下界は地中の闇の世界である。この三界のつながり、回転が再生の原理を生み出すのである。木は地中深くから水を吸い上げて実をつけさせ人間と動物の生存を約束する¹⁷⁾』。古木はこの再生と復活を人類が生まれる前から演じて来たのである。

父性世界と母性世界

湖の中に人工的に作られた島に柵で囲まれた城塞のようなタタラ場が見える。それは橋一本で陸とつながっている。

タタラ場の意味するものは何か、何を象徴しているか。

タタラ場それ自体人工の工作物である。まさに人間が作ったものであり、人間そのものである。一個の個として存在し、外と内との区別は明快で城壁によってはっきりと外界とは区別させている。外は敵であり約束事でしか関係を結べない世界であり、内においても厳しい決まりによって秩序を形成しているのである。法によって治められた合理的な世界である。そこで価値あるものは、知恵であり、力であり、秩序である。またそこには目的があり、それは物を作り出すことである。富を作り出すことである。それは、砂鉄を掘り、森の木を切って燃料にし、タタラ製鉄で作りに出したハガネで武器を作ることやそれを売ることと金を手に入れることである。そこでの最高の価値はより良いハガネを作ることである。まさにタタラ場の価値観は良いか悪いかの判断機能に拠っている。

このように、知恵、力、秩序、法、そして良いか悪いかといった区別、判断といったものは男性性の価値観そのものを表しているといえてよい。故にタタラ場は男性社会であり、男性性の象徴であり父なるものの世界であると考えられる。

また、タタラ場は火の世界で森は水の世界という対比が考えられる。

火も水も共に創造的であって破壊的である。火は鉄を鍛え富を作り出すが時には全てを焼き尽くし破壊することがある、一方、水は生命を育て生かすが時

には洪水となって全てを破壊することになる。共に『生と死の源泉であり、発
生力にして浄化力¹⁸⁾』である。また、火と水は対立物であると同時に相補的
な関係にある。

象徴的には、『火が光、灼熱の太陽、高い天を表すのに対して、水は潮の干
満を支配する冷たい月、深い海を表す¹⁹⁾』と言われている。

ここに、森（＝母性性）とタタラ場（＝父性性）の対立が想定され、前述し
た非人間的なものと人間的なものとの対立と重なるのである。

アシタカは、エボシ御前に率いられた牛飼い達がタタラ場に到着してそれほ
ど時間が経たないうちに、負傷した2人の牛飼いを送り届けた。それを怪しん
だ力のゴンザがアシタカの人体を定めようとする。その時、牛飼いの甲六の妻
トキが出てきて、ゴンザはトキの勢いに押されてしまう。トキは明るい女性で
アシタカに頭巾を脱いで顔を見せるように言う。そこに御前が現れアシタカを
『旅のお方』と呼び、客として迎える意志を伝える。これがアシタカとエボシ
御前との初めての対面である。

タタラ場は決して余所者を簡単に入れる場所ではない、アシタカが簡単に入り
込めたのはそれだけの手続きを踏んだことによる。つまり、牛飼いを助ける
という、タタラ場の役に立ったことが認められたからである。これが男の世界
のルールである。そして、それはトキという明るい女性性²⁰⁾（アニマ）によっ
ても救われるのである。アシタカの男性性はまだ一人前の男性として機能する
までには育っていないのである。そしてまた、タタラ場の時間と同じ時間軸で
行動しているわけではない、まだ、魔術的な時間の中にあり、それをゴンザが
指摘し怪しんだのである。ここで御前はタタラ場の全員、男からも女からも慕
われ、尊敬されている女性であり、タタラ場の事実上の支配者であることが分
かる。御前は沈着・冷静で判断力に優れ、それでいて物怖じしない自信に溢れ
た女性である。容姿は優れ、タタラ場には似つかわしくない身のこなしである。
夫を持っていない。係累もない。出自や経歴も不明である。直接接した印象
以外は何も分からない謎の人物である。

アシタカは、この人物からタタラ場の客になるように言われたことで、まず

はタタラ場という男の世界に入る資格が承認されたということになる。しかし、『旅のお方』という呼び掛けは、何か空々しい響きがあり、距離を置いた言い方である。その空々しい言い方が、かえってアシタカが何か明確な目的をもってここに来たことを感じさせるのである。物語が進んで、御前から「ここに（タタラ場）とどまり力をつくさぬか」と誘われるのであるが、御前の鋭い勘が働いていると言わねばならない。

フラッシュバック

次に、アシタカは、死んだ2人の通夜を兼ねてタタラの男達と一緒に食事をする。その時、ある男の話しから、御前の石火矢のツブテでナゴの守が撃たれ、そのためタタリ神になったことを覚る。その時、アシタカの右腕のタタリヘビが動き、牛飼いの長らしき人物から「旦那、腕が痛むんで」と聞かれる。女達はアシタカに興味を示し、自分たちが働いているタタラ踏み場を見に来ることを約束させる。アシタカが御前に直接会いに行くと、丁度、御前はゴンザ相手に作ったハガネを金槌で叩いて品質を調べ商品として送り出す準備をしているところであった。アシタカはツブテを取り出し、これがタタリ神の体内から出てきたもので「心当たりはないか」と聞くと、御前は「ツブテの秘密を調べて何とする」と問う。それに対してアシタカは「曇りなきまなこで見るため」と答える。それを聞いて御前は「自分の秘密を見せよう」と、誰も入ることを禁じている秘密の場所に案内するのである。そこでは、業病に苦しみ世間からは疎んじられた人達が、御前の依頼で女性でも使える軽い石火矢を作ろうとしていた。そして、御前ははっきりと自分が石火矢を放ったことを認めた。その時、アシタカの右腕が激しく動いて、剣を抜こうとするのを、左手で必死に押さえる。秘密の場所からアシタカが一人で戻る時、タタラ踏み場を通り掛かり女に替わって一人で吹子を踏んでみる。

一緒に食事をするということは、まず気を許したことであり、仲間になったことである。仲間になったことで、タタリ神の経緯を知った時、タタリヘビが騒ぎ、苦しみ憎しみの再体験として腕に痛みが走る。これもまたフラッシュバッ

ク現象と思われる。後にこのフラッシュバックの原体験を見極めようとエボシ御前に会いに行くことになる。また、このときアシタカは『旦那』と呼ばれ、もう一人前に近い扱いを受けていることが分かる。アシタカはタタリ神の事実を確かめに御前に会いに行く。御前はタタラ場の主としてハガネの善し悪しを判断し、それを富に替える仕事をしている。これは、ハガネを金槌でカンカン叩くことに象徴され、本来男性の仕事であり、男性性が持っている判断機能を女性である御前が行っているということを示している。これは、御前の内面世界の男性像としてのアニムス²¹⁾が成せる技であるかも知れない。一方、タタラ場には真の男性性を発揮する男性がいなか育っていない可能性がある。ゴンザは力はあるかも知恵はない。そして、アシタカはエボシ御前に対決するのである。ハガネを作るために森を開こうとして、イノシシ神と戦った時、御前が撃った石火矢のツブテによって骨を砕かれ肉を引き裂かれたナゴ守がタタリ神になったことを御前が認めた時、アシタカは原体験に直面し呪われた右腕が殺意をもって御前を切り殺そうとするのであるが、左腕がそれを止める。このことは呪いに対する直面化であり心的外傷についての洞察が起こる切っ掛けになるかもしれない。そして、それはタタリ神の呪いという外傷体験のさらに深いところでの体験があることを予想させる。それは何か。御前はアシタカの殺意を知るがそれをものともしない強さ、合理性を持っており、目的のためには少しぐらいの犠牲はしかたがないという大義名分が生きているのである。これはまさに男性世界の論理である。そして、アシタカは、御前の質問に、「(真実を)曇りなきまなこで見ることである」と答える。これは、今ここで、体験していることをありのままに正面から見るということである。そこで御前は笑いながらも、アシタカの前に自己開示してみせるのである。それは、御前以外は誰も入ることのできない場所、つまり、御前の秘密、誰にも覗かせない御前の心の中である。余りにも簡単に自分の心の中を見せようとする御前には何か予感めいたものがあるのではないかとと思われる。アシタカに待ち侘びた男性性を見出だしたのかも知れない。秘密の場所は業病に取り付かれて世間から遺棄された人達を看病する場所であった。しかし、その人達を癒すことは御前自身が

癒されることであつたと思われ、業病自身の不条理さと御前の運命の不条理さが重なり感情転移現象²²⁾を起こしているのではないかと推測される。御前は感情転移を、秘密の場所を見せるということで、自己の男性像（アニムス）をアシタカの男性性から解釈されることによって解こうとしたのではないか、御前自身がアシタカによって救われたいと願ったのではないかとと思われる。御前の“心の暗闇の部分に光（アシタカ）が入れば、心は豊かなものになるのではないか”。しかし、アシタカは何も言わない、言うには余りにもアシタカは幼過ぎた。御前は内心の暗い部分で何をしていたか、人を殺す戦の道具となる飛び道具で女でも使える石火矢を作っていたのである。行動は非常に男っぽいものがあり、現実吟味力の切れ味の鋭さを感じさせるが、どこかひ弱く、甘い感じを受ける。これは御前の女性像（アニマ）から来るものと考えられる。タタラの男衆が「エボシ様は甘やかしている」と言っている。御前にはどこか徹底しない甘さがある、母の愛には常に例外があり、「許すべからざるものが、今回は特別に許される」、父には例外はない「規則は規則である」。

結果的には、この時点で、アシタカは何も言わない、言うには幼過ぎどう受け止めていいか分からなかったのであろう。アシタカの男性性は御前を受け止めるにはまだ未発達で御前を救うことができず、御前は未熟な“内なる異性（アニムス）”に導かれて悲劇に突き進んで行くのである。

帰りにアシタカはタタラ踏み場で吹子を踏むが、一人で10人分の力を出すことになる。これは、アシタカ自身がタタラ場を知ることであり、力を試すことである。10人力であることが分かった。これは後でも証明される男性性の一つの要素である力を証明したことになる。

女性像との出会いと死

その頃、山ではもののけ姫が山犬に乗ってタタラ場へと向かう。エボシ御前との決戦である。アシタカはすぐさまその気配に気付く。姫が柵を越えてタタラ場に侵入し大屋根に立つ。警鐘が鳴り、御前がゴンザと石火矢を持った2人の女と共に広場に現れる。「夫を山犬に噛み殺された妻たちの恨み」と御前が

名乗る。大屋根の姫と広場から見上げる御前が対峙する。策略で、姫が大屋根から下に転げ落ちる。御前は「下に落ちたところを撃て」と命じる。落ちたところを撃たれて仮面を砕かれる。アシタカが駆け寄り森に帰るように言うが逆に切り付けられて頬に傷を受ける。姫は立ち上がるとゴンザを飛び越えて御前に殺到する。周りをタタラ場の人々が取り囲み、姫と御前の凄まじい切り合いが始まる。

姫は仮面と耳の付いた山犬の毛皮のようなマントを羽織ってタタラ場に侵入し、仮面を打ち砕かれる。動物の仮面を付けるということは、付ける人に動物の知恵を授けることであり、人間の五感を鋭くし、失われた第六感の能力を回復することである。仮面を砕かれることによって、その下にある人間の顔が見えるのである。しかし、顔には入墨があり、これは最早消えることのない山犬モロ一族の印であり、森の住人であることの証しである。入墨によって勇気が湧いて来るのである。未開人が入墨をしたり、戦いや儀式の時に顔を化粧するのはそのためである。この“もの”が“のりうつる”こと、“変身すること”が“もののけ”であり、人間でありながら人間でないものなのである。その証拠に動物の言葉が分かることに表れている。大屋根に立った姫の姿は何も知らない無鉄砲な少女の姿そのものである。スカートを翻し、一途に御前を睨むその姿は14、5才の女子学生風にしか見えず、中性的な印象すら与える。それに引き換え、地上に立つ御前は分別に長けた大人である。きちっと作戦を立て、自信に満ちて、悪びれたところのない姿は到底並の女性ではないことを表している。もののけ姫とエボシ御前。子供と大人。そして、ここでアシタカは御前の策略を知るのであるが、御前にとって策を弄するのはタタラ場を守る上で当然のことである。大人の世界のリーダーにとっては時には汚い手立ても大義のためには正当化されるということを目の前で体験するのである。それに対して、アシタカは姫に知らせようとするがまだアシタカと姫の間にはつながりが出来ておらず、全く気付かないのである。アシタカの心の中では、自分は姫に近い存在であったかも知れないが（これはアシタカの思い込みである）、姫にとっては御前と同じ人間以外の何者でもなく、敵対するものであった。姫はアシタ

カの中に生まれたばかりのアニマ像かもしれない。これはアシタカの中で成長しだした男性性と未熟なアニマがまだつながっていないことを示しているのではないか。だから、アシタカが助けようとした姫（自分のアニマを助けようとしたのだが）は敵として彼に切り掛かったのである。この傷は最後まで消えなかった（この物語の最後でもまだ傷は消えず、姫がまだ発達途上にあることを示している）、消えるのはアシタカのアニマが成熟した時であろう。姫と御前の凄まじい切り合いが始まるのであるが、この切り合いは余りにも激しいものであり、前世からの何か怨念にも似た骨肉相い食むといった凄まじさを感じさせる。また、切り結ぶ2人は素顔である。この時初めて、相手の素顔を認め、相手の息遣い、相手の体温を感じるぐらいに接近する。これには隠された秘密を感じるが、これについてはもう少し先で考察することにする。

この決闘場面で、アシタカの腕のタタリヘビが以前にも増してはっきりと紫色の光を放ちながら凄まじく動くのである。止めようとしたゴンザの剣もたちまちタタリヘビによって折れ曲がってしまう。そしてアシタカは「これが憎しみの正体だ」とタタリヘビを示しながら強引に二人の間に割って入り、御前と姫の両方を当て身で気絶させる。アシタカは御前をタタラ衆に任せ、自分は姫を担いで門に向かうが、途中で石火矢で後ろから撃たれ、左胸をツブテが貫通する。それに構わず血をばたばた地面に落としながら門に向かう。門番が、「門は開けられない。お戻りください」と言うが、アシタカは「自分で決めてここに来たのだから、自分の意志でここを出て行く」と言って一人で門を開けてヤックルと出て行く。

また、タタリヘビが動き、フラッシュバックが起こるのであるが、今回は明確にアシタカ自身がその正体を意識化し言語化するのである。そしてこれ以後フラッシュバックは起こらない、一応ここで心的外傷に対する洞察が起こるのであるが、呪いの傷はどんどん広がり命を蝕むのである。意識化され言語化されただけでは心的外傷体験はそう易々と癒されないのである。

二人の間に入って両方とも気絶させるのは、アシタカが自分の立場を初めて明確に実体験したことを表している。その立場は、エボシ御前ともののけ姫の

間に立って調和を計る調停者としての道である。タタラ場と森、人と神、火と水、知性と神秘、合理性と不条理性の調停者である。これは並のことでは引き受けられないことであり、ここからアシタカの迷い、苦悩が始まるのである。これは命懸けの仕事である。その力はまだアシタカにはないのである。偶然の弾みではあっても、一度死ぬことになるのは有り得ることかも知れない。それほど大変なことなのである。アシタカは撃たれて瀕死の重傷を負いながらも気絶した姫を守って（タタラ場では殺されてしまうだろうから）門を出て行こうとする。門の外の世界は魔物の世界である。10人力でないと開かない門を一人で開けるのである。すでにアシタカには10人力が証明されていてそれが役に立つことが明らかになる、更に重大なことは、アシタカが「自分で決めてここに来たのだから、自分の意志でここを出て行く」という自己決定を明確にし、判断を示したことである。これはぼんやりしていた自己意識が明確になってきた証拠である。この断固とした決断は誰も止めることが出来ないのであり、その実行を示したことになる。

山犬と一緒に、ヤックルに姫を乗せ自分も乗って出て行くのだが、深手のためアシタカが背から落ちた時、食べようとする山犬を制して、意識が戻った姫が自分で止めを刺そうとする。その時、アシタカが「生きろ」と言うのに姫がすぐに反発して「お前に何が分かる」と言って喉に刃を突き立てようとする。その時、アシタカが「そなたは美しい」と言うのを聞いて、姫は驚愕のあまり飛び退く。姫はアシタカを殺さず、シン神の森に連れていくことにする。

姫の状態は、何故いまここに居るのかも分からないし、アシタカの気持ちも分からないくらいに無知な状態にある。原始的な獣の気持ちに等しい。それゆえアシタカの人間としての気持ちから出た言葉を理解することが出来ず、人間の感情を解することが出来ないのである。しかし、一度は人間の感情に触れている、それはアシタカが姫と御前の間に入った時にアシタカの右腕に噛み付き、憎しみの正体であるタタリヘビに触れショックを受けたことである。そして瀕死のアシタカによって発せられた次の言葉「そなたは美しい」という言葉に、初めて人間の言葉に触れたときの衝撃を示すのである。そして、自分では判断

できず、シシ神にアシタカの運命を託すのである。

シシ神とは何であろうか。

[引用・参考文献]

1. 河合隼雄『母性社会日本の病理』中公叢書
2. エーリッヒ・ノイマン著『女性の深層』紀伊国屋書店, 松代洋一・他訳
3. E. ユング著『内なる異性』海鳴社, 笠原嘉・吉本千鶴子訳
4. C. G. ユング『人間と象徴』河出書房新社, 河合隼雄監訳
5. 樋口和彦『ユング精神分析の現代父親観』精神療法 Vol.21 No.5
6. ジーン・C・クーパー著『シンボルイズム (象徴の比較文化)』彩溪社, 日下洋右・白井義明訳
7. 北田穰之介・馬場謙一『精神発達と病理』金剛出版, 下坂幸三編
8. 氏原寛・成田善弘編『転移／逆転移－臨床の現場から－』人文書院
9. 松下正明編『神経症性障害・ストレス関連障害』臨床精神医学講座 5 巻, 中山書店
10. M. ポングラチュ, I. ザントナー著, 種村秀弘・他訳『夢占い辞典』河出文庫
11. アニメージュ編集部・編『もののけ姫』徳間書店

[注]

- 1) 河合隼雄『母性社会日本の病理』
- 2) E. ノイマン『内なる異性』
- 3) 河合隼雄, 前掲書
- 4) 河合隼雄, 前掲書
- 5) 河合隼雄, 前掲書
- 6) J. C. クーパー『シンボルイズム』
- 7) J. C. クーパー, 前掲書
- 8) 河合隼雄, 前掲書
- 9) 松下正明編『神経症性障害・ストレス関連障害』
- 10) 河合隼雄, 前掲書 P20
- 11) 北田穰之介『精神発達と病理』
- 12) 河合隼雄, 前掲書
- 13) J. C. クーパー前掲書, 河合隼雄前掲書
- 14) 河合隼雄, 前掲書
- 15) 松下正明, 前掲書

- 16) J, C. クーパー, 前掲書
- 17) J, C. クーパー, 前掲書 P62
- 18) J, C. クーパー, 前掲書 P136
- 19) J, C. クーパー, 前掲書 P137
- 20) 河合隼雄, 前掲書, E. ノイマン, 前掲書
- 21) E. ノイマン, 前掲書
- 22) 氏原寛・他『転移／逆転移』